

# 6000 人のユダヤ難民の 命を救った外交官

## ちうね 『杉原千畝を語る』講演会

NPO 法人「杉原千畝 命のビザ」顧問  
杉原美智さん



第二次大戦直前、ナチスドイツによる迫害を逃れ、ポーランドからリトアニアへ避難してきたユダヤ人たちに、外務省の訓令に反して2000枚以上の日本通過ビザを発行、その家族らを含め6000人の命を救った杉原千畝リトアニア領事代理。今回の公開例会は、千畝の人道的な行為を世界に伝えるため、NPO法人を設立して国内外でのイベント、講演などの活動を続けている千畝の長男夫人、杉原美智さんに『杉原千畝を語る』と題して講演していただきました。

杉原千畝

講

演は、ビザ発行までの当時の状況

がよくわかる短いドキュメンタリー映画「ヘブンと呼ばれて」の上映から始まりました。

福井県敦賀市の時計店に残る動かなくなった古い時計が映し出され、「そこにナチスドイツの迫害から奇跡的に逃れてきた壮絶な人間ドラマが隠されている」というナレーションが。

1939年、ドイツ軍がポーランドの西半分を制圧、ユダヤ人から財産を没収し、強制連行を始めた。続いてソ連軍が侵攻して同国の東半分を制圧し、ユダヤ系の人たちを次々逮捕、シベリアに送り込んだ。

そのため、ポーランドから隣国のリトアニアなどに、多くのユダヤ系難民が逃がれてきた。

当時、世界各国はユダヤ難民の受け入れにいろいろ、条件を付け、事実上、門戸を閉ざしていたが、日本政府だけは「ユダヤ人を排斥しない」という方針を発表していた。

そこで、千畝が責任者だっ



講演する美智さん（左）と副理事長のまどかさん

たリトアニアの日本領事館に多くのユダヤ人が訪れ、日本通過のビザ発給を求めた。しかし、日本政府は行き先が確定していない人、十分な旅費を持たない人にはビザを出さない方針。その条件を満たさない人が大勢いた。千畝は苦悶の末、



人道を優先し、領事館閉鎖の直前まで2139枚のビザを、寝食を忘れて書き続けた。

「命のビザ」を得たユダヤ人たちはシベリア鉄道で極東のウラジオストックを経て、日本の客船で敦賀港に到着。一年半以上をかけた長く苦しい逃避の旅ただだけに、港を目前にした時、ユダヤ人たちは期せずして歓喜の歌を歌い始めた。それは、現在のイスラエル国歌

になっているものです、と説明が入る。

「ヒトラーもスターリンもいない。敦賀はまさに、ヘブン（天国）と感じました」、

「日本は私の心と魂のすべて」、「息子がここで生まれました。新しい人生の出発の地だった」などと生き残った人たちの証言が続く。敦賀では旅館が無料開放してくれた。リンゴをくれる人もいた。

ユダヤ人たちは生活費に充てるため、持っていた時計や貴金属を敦賀駅前の時計店に買ってもらった。その一つが冒頭に映し出された古い時計。映画では、「奇跡の旅の唯一の物証」と紹介しています。間もなく、日独伊3国同盟が締結され、ユダヤ難民たちは米国、豪州などに去って行った。

映画は、豪州で千畝の記念碑を建てた生存者を紹介しながら「あの日、ヘブンと呼んだ港と自由の歌は、今も彼らの心とあなたの目の前に広がっています」というナレーションで終わる。

ナチスの迫害を逃れて領事館に押し掛けたユダヤ難民たち

美智さんによると、千畝がいたリトアニアの領事館の建物は、今、記念館になっており、「杉原ハウス」とも呼ばれ、国際交流の場として使われている。現在、地元のボランティアたちが古くなった建物の修復を行っている、などと紹介した後、千畝の生い立ちから語りました。

### 医専の入試で白紙答案

杉原千畝は1900（明治33）年、現在の岐阜県加茂郡八百津町に生まれた。小学生の時から全甲（オール5）の優秀な子供だった。長じて、英語で身を立てたいと思っていたが、父は医者にするために、医学専門学校への入学願書を出していた。医学部進学を希望していない千畝は受験の日、弁当だけを食べ、白紙答案を提出。「落ちるはずはない」と考えていた父は医専に問い合わせ、白紙答案のことを知り激怒、千畝を勘当してしまった。

早稲田の高等師範学校英語科に入学したものの、家からの仕送りはゼロ。様々なアルバイトで学費と生活費を稼いだ、という。このころから、千畝は他に流さ

れない確かな意志の持ち主だった、といえそうです。

### 官費留学生試験に合格 ハルピンへ

そんなある日、外務省が留学生募集試験の広告を出しているのを見つけた。美智さんは言う。

「お金をもらえて勉強をさせてもらって、将来の自分のためにもなる、ということ千畝は大変、喜んだそうです」。

それから猛烈に勉強し見事合格。早稲田を中退し、外務省の官費留学生としてハルピンに。「これからはロシア語が大事になる」というアドバイスを人から受けてロシア語を学ぶことになった。外務省に正式採用され、ここでの功績が千畝の評価を大いに高めることになる。

### 北滿鉄道買収で頭角現す

1932年、満州国が建国され、千畝は外交部に出向。ソ連から北滿州鉄道を買収することになった。ソ連側の提案は6250万円。しかし、千畝はロシア人の友人たちの情報も得て列車の古さ、運送能力、性能など一切を詳細に調べ上げ、その価値は1700万円として交渉をまとめた。この額にはロシア人労働者に対する退職金も含めていた。しかし、以降、千畝はソ連にとっては「ペルソナ・ノン・グラータ」（外交上、好ましからざる人物）になる。

やがて、関東軍が千畝の能力を見込んで破格の条件でスパイの仕事を要請してきた。しかし、これを拒否して帰国。

美智さんによると、「狭い見方で無理を強いる職業軍人とは考えが合わない」と話していた。

帰国した千畝を外務省は外交官としてソ連へ派遣しようとしたが、ソ連から拒否され、隣のフィンランドのヘルシンキへ。2年後、リトアニアのカウナスに新しい領事館を開設することになる。赴任直後、ヒトラーが率いるナチスドイツがポーランドに侵攻し、千畝はユダヤ系難民と対峙することになる。

### ビザ発給を決断

ナチスのユダヤ人弾圧が激しくなり1940年7月、領事館の前にユダヤ人たちが集まり始めた。日がたつにつれて人数は増え続け、千畝は5人の代表を領事官に入れて話を聞いた。彼らは日本通過ビザの発給を嘆願した。しかし、ビザ発給の条件を満たしていない人が多く、発給したとしてもウラジオストックや日本で足止めになり、混乱が予想された。



決断の部屋

ビザ発給が決断された領事館の部屋

外務省に善処を求めたが「規則通りにやるべき」という回答。ナチスの目を盗んで馬車の中に隠れ、夜道を逃げてきた難民たち。そのまま見殺しにはできない。千畝は妻、幸子とともに夜も眠らず、悩み抜いた末に発給を決断した。昇進停止、



解雇を覚悟のうえでの決断だった。

「全世界に隠然たる勢力を持つユダヤ民族から、永遠の恨みをかってまで、旅行書類の不備などを理由にビザを発給しないことが国益にかなうことだというのか。苦慮、煩悶のあげく、人道と博愛こそ第一という結論を得た。後は何も恐れることなく実行した」。千畝は後に妻、幸子（故人）に勧められて書いた手記の中でそう述べている。

千畝はこの時、ビザ作成を幸子には手伝わせなかった。ナチスの秘密警察の目が光るなか、もし、妻も協力者として逮捕されると、3人の幼い子供たちの将来が心配だったからだ。

ロシアの領事館にも行き「シベリア鉄道経由で彼らを通してやってほしい」と依頼した。

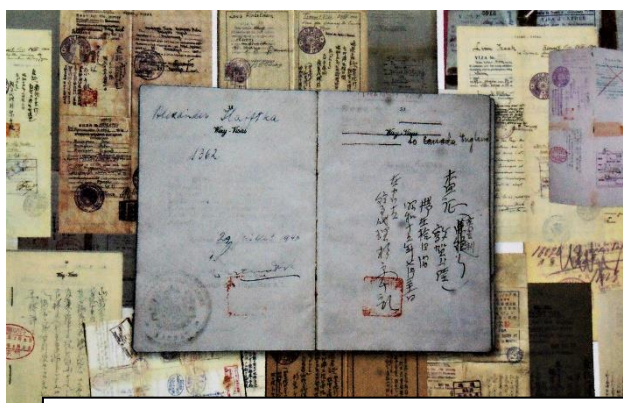
美智さんは「この時の千畝のロシア語が『非常にきれいだ』と好感を持たれ、快く受け入れてくれたと聞いています」と話していました。

### 神に背けない

領事館閉鎖・退去まで1月ほどしかなかったため、千畝は寝食を削って毎日、ビザを書き続けた。

「ある日、千畝は激しい疲労のため一度だけ近くのホテルに泊まったことがあり、朝になっても起きてこなかったそうです。この時、母（幸子）が一枚だけ、千畝の筆跡をまねてビザを書いた、ということです。それがいつの日か見つかる日が来ることを楽しみにしています」と言う。

千畝は「この人たちを助けなければ、私は神に背いたことになる」と後に語っている。千畝は20代のころ、ハルピンのロシア正教教会でキリスト教の洗礼を受けていた。



千畝によって発行された旅券やビザなど

### 「あなたの席はありません」

終戦を迎え、2年間、ソ連の捕虜収容所での生活を送り帰国。外務省に行くと「あなたの席はもうありません」。

千畝は何も言わず、外務省を去り、民間会社へ。最初は食べるのがやっとの極貧生活だったが、7か国語を話せたからロシア語教師、NHK国際局の通訳などを経て、最後に貿易会社を立ち上げ1965年から77年までモスクワの事務所長を務めた。

晩年は、静かに過ごしていた。しかし、千畝のビザで救われた一人のイスラエル人が日本に来て千畝を探した。外務省を訪れ「1939年から40年にかけてリトアニアのカウナス領事館にいたセンポ・スギハラだ。調べればわかるはずだ」と迫った。chiuneでは覚えにくいことから、千畝はユダヤ人たちには「sempo」と呼んでくれ」と言っていた。しかし、外務省は「該当者なし」の一

点張りだった。

### スギハラが見つかった！

ところが、千畝は帰国したとき「将来私を訪ねてくるユダヤ人がいるかもしれない」と考え、イスラエル大使館に自分の住所と名前を書いたメモを残しており、これが見つかったことから千畝の居場所がわかり、「スギハラが見つかった！」と世界中のユダヤ人に伝えられた。

1985年、イスラエル政府は多くのユダヤ人を救った功績に対し「ヤド・バジエム賞（諸国民の中の正義の人賞）」を千畝に贈る。贈ったのは宗教大臣。千畝のビザで助かったユダヤ難民の一人だった。

これを機に隠れていた千畝の行為が国内外で知られ、評価され始めた。しかし、その翌年夏、千畝は86年の波乱に満ちた生涯を閉じた。



千畝は、こう語っている。

「私のしたことは外交官としては、間違ったことだったかもしれない。しかし、私には頼ってきた何千人もの人を見殺しにすることはできなかった」。

### NPO 発足

千畝の精神を世界に伝えるため2001年、夫人、幸子が初代理事長になりNPO法人「杉原千畝命のビザ」が発足、千畝に関する国内外でのイベント、講演会、写真展の開催・参加、さらにホームページ、フェイスブックを通して、命の大切さと平和の尊さを世界に訴え続けている。

講演で美智さんは、外交官としての凜とした千畝だけでなく、家庭でののんきで意外な面も紹介しました。「千畝は医学と科学に弱く、子供に与える薬を、多ければ早く治るだろう、と一度に全部、与えてしまったことがある。片付けることは好きでしたが家族の大事なものでうっかり捨ててしまう、といったことがよくあり母、（幸子夫人）に叱られていたそうです」という。

渡航のビザではなく「命のビザ」。この名は、後に幸子が出版した「6000人の命のビザ」からきている。

杉原千畝を顕彰する記念館や碑などが各地にある。記念館は生まれ故郷の八百津町、リトアニアなどに。「スギハラチウネ通り」はイスラエルとリトアニアに、早稲田大学構内には千畝顕彰の碑が。こうしたところでのイベントに、美智さんや、この日の講演に同行した娘のまどかさん（副理事長）らは積極的に参加、関係者と交流して平和と命の尊さを発信している。講演では、こうした場での交流のエピソードもたくさん語っていただいたが、紙数の都合で割愛させていただき

ました。

美智さんは最後にこう結びました。

「千畝の残したものを大事にしていきたい。皆さんや若い人に残せるものがあるればぜひ、残して欲しいと思って今日、皆様のところへお邪魔しました」。

「杉原千畝命のビザ」は昨年、ユネスコの「世界の記憶」に登録申請されており、まもなく審査の結果が出るということです。

(文中、千畝、幸子両氏の敬称は省略。写真は講演会場のものを除き NPO 法人「杉原千畝命のビザ」から提供を受けました)